
魂古今 <僕の魂は何処へ…>

六星かのり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魂古今く僕の魂は何処へ…>

【NZコード】

N9033E

【作者名】

六星かのり

【あらすじ】

「死んだら魂は何処へ行くのか?」それは、些細な疑問から全てが始まった。高校三年の同級生、田所・一ノ瀬・本庄の三人が不可解な出来事に巻き込まれていく、チサスペンス調ファンタジー（？）の始まりです。三人は答えを見つけるのか……あなたの魂は、昔は誰のものですか……？

【1】(前書き)

「メンツや評価のまつりじへお願ひします」
今後の励みになつますので^ ^

【1】

「ねえ、人間が死んだら、魂って何処に行くのかなあ？」

「は？オマエ何訳の分からない事言つてるんだ？」

「だつて、気にならない？今感じている思いとか、感情つて、死んだら何処に行つちゃうんだろ？…。」

「おお～～いみんなあ～。ヒロシがまた変な事言い出したぞあ～。」

「ちょっと！一馬あ！ちゃんと話を聞くつて約束だつたろあ～。」

「こんな風に、それは些細な疑問から全ては始まつた。」

死んだら、魂は何処へ行くのか…。

俺は、別にこういう事を考える事が変だとは思わない。

空想とか妄想とか、何かを考えるという事が好きだからだ。

だけど、クラスの皆、特に今日の前に居る一ノ瀬一馬くいちのせかずまゝは、いつも俺の話を小馬鹿にした様な態度で聞きやがる。彼とは小学校からの幼馴染で、高校三年の今では、もう八年の付き合いだった。

何の因果か分からぬが、彼とはずっと同じクラスなのだ。

俺が思いついた疑問や、空想論とか色々な話を聞いてくれる唯一の存在。

一馬はどう思つているか分からぬが、俺にとつては大事な親友だつた。

だから彼には、どれだけからかわれようとも、許すことができるのだ。

「ほほあ～。また田所ハカセの妄想劇場が始まつたのかい？」

そう言いながら顔をニヤつかせ、同じクラスの本庄卓くほんじょうすぐるゝがやってきた。

はつきり言って、俺は本庄が大嫌いだ。

一馬のからかいに便乗して、面白がつて更に輪をかけて俺を馬鹿

にする。

なにが田処ハカセだ。

俺の名前は田所博士くたじこうひるしほなのに、本庄は田処ハカセと呼ぶ。

本庄にそう呼ばれる度、俺は悔しくてたまらなくなる。
だけど俺には、口に出して言い返すことができない。

本庄は生徒会会長で、成績は常に学年トップ。

そんな輩を相手に口論しても、勝てる筈はない。

俺は負け戦が嫌いなだけ。

小さい男だと思われても、弱虫だつて思われても構わない。
勝てないと分かっていて立ち向かうのは、勇気なんかじゃない。

自分の力量をわきまえない、愚かな行為だと俺は思つんだ。

「おー、本庄。ヒロシのことをハカセって呼ぶのやめろよな。今度
言つたらシッペだぞ。」

と、一馬は笑いながら言つ。

「おおーごめんごめん。じゃあ今度からはキョウジュにするわー。」

本庄は悪びれた様子も見せず、ニヤニヤしながらそう返した。
これがいつものパターンだ。

昼飯を食べ終わり、俺が雑誌を読んでいると一馬が来て、
「なあ、今日こそこからかつたりしないから、面白い話聞かせてくれ
よ」

「この前も同じこと言つて、結局當時に言いふらしたじゃないか。」

「あの時はあの時、今は今つてな。これは男の約束だ。たのむ、俺
を楽しませてくれ。」

そう言つ時の一馬の目が、俺は好きだった。

まるで、子供が親に絵本を読んでとお願ひするような無邪気な目。
いつもその目に騙されて、俺は自分の考えている話をてしまつ
んだ。

そして、結局は皆に報告して、話を聞きつけた本庄がやつて来る。

毎日、同じことの繰り返し。

俺に学習能力が無いわけじゃない。

「馬が俺の所へ来る度に、「今日は言わないぞ!」と心に誓う。

「それで、今日の議題は何?」

本庄は聞いた。

だけど俺は、絶対に口を開かない。

「コイツとは眞面目に話したって、結局、最後には話の腰を折られてしまうのが目に見えているからだ。」

「頭が良い」と、「頭が柔らかい」というのでは大きく違う。本庄は頭が良い。それは大いに認めよつ。

だけど、決して頭が柔らかいとは思えない。

彼は自分の意見が全て正しいと思い込み、それを他人に押し付ける。

周りの意見を受け入れなれないのは、頭が固い証拠だ。

「常識」とか「普通」とか言う曖昧なものに捕らわれて、そこから少しでも外れたモノを全て卑下する。

人には、それぞれに考え方があつて当たり前。

例えそれが「常識」や「普通」から脱線していても、肯定はしないでも、「そういう考え方もあるのか」と受け入れるのが、頭の柔らかい人間だと俺は思つてゐる。

俺の考えが、正しいかどうかなんて分からぬ。だけど、この考えを否定する権利なんて、誰も持つてはいないんだ。

「今日は、死んだら魂は何処へ行くの? だつてさ。」

一馬が、似ても居ない俺の真似を交えて言った。

さすがに少し腹が立つたが、とりあえずは無視をする。「へえ」。死んだら魂は何処へ行くか。なるほどなあ…。」

本庄は、俺が読んでいた雑誌の表紙を見つめ、深く考えこんだ。

それは、いつものパターンではなかつた。

いつもの調子で行くと、

「何だよそれ。そんなもんは消えてなくなるに決まつてるだろ。」

と、決め付けで即答しそうなもんだが、今は深く悩んでいるのだ。
少し不気味な光景だつた。

やがて、昼休みの終わりを告げる呼び鈴が鳴つた。

それでも本庄は深く考え込んだままだつた。

明らかに、いつもの彼とは様子が違う。

そして、何かひらめいたかのように、急に俺の顔を見て、

「あのさ、今日の放課後、時間あるか?」

「え?俺?」

「そうだよ。お前しか居ないだろ。」

「放課後なら、毎日時間あるけど?」

「そうか。……じゃあ今日の放課後、家に来ないか?」

「本庄の家に? 何で?」

「何でも何も、その課題について、もう少し話がしたいんだ。もし
一人が嫌なら一ノ瀬も一緒にいいぞ。」

そう言つて、本庄は一馬の方を見た。

急に話を振られ、驚きの表情で一馬は答えた。

「俺もかい!……まあ、いいや。どうせ俺も暇だから付き合つわ。」

「じゃあ決まりな! 田所もオッケーだろ?」

「う…うん。」

俺は答えに躊躇つた。

別に、本庄の家に行くのが、嫌だつたからではない。

本庄が、俺の事を普通に苗字で呼んだ事に、違和感を感じたから
だ。

何か嫌な予感がある。

いつもと違う事が起こる時は、大抵が悪い事が起こる前触れなの
だ。

この前も、俺の母親が柄にも無く、ぱちりと化粧を決め込んで
だ。

出掛けたと思つたら、交通事故に遭い全治一ヶ月の大怪我をした。

その前は俺が中学2年の春、生まれて始めて異性に告白され上機嫌で家に帰ると、愛犬のロンが死んでいたのだ。

他にも、上げたらキリが無い。

俺が嫌な思い出にふけていると、やがて五時間目のはじまりを告げるチャイムが鳴った。

「じゃつ、そういうことでヨロシクな。」

そう言って、本庄はさっさと行ってしまった。

「なんか…おかしい事になつたけど、まあいつか。アイツの家、金持ちらしいし、美味しいモンに在りつけるかも。じゃあな。」

そういう残し、一馬も自分の席へと戻つていく。

やがて国語の担当、大原先生が教室に入つてきて、いつものように授業が始まった。

だけど、授業の内容など全く頭に入つてこない。

初めて本庄の家に行く緊張と、いつもと違う事が起きた不安が俺の心を搔き乱す。

頭の中は放課後のことでいっぱいになつた。

そして、嫌な予感を覚えつつ、放課後はやつて來たのだ。

【 続く】

【2】(複数形)

評議や公演にてお問い合わせ下さい

【2】

放課後。

俺たちは、約束通り本庄の家に来た。

本庄家が金持ちだという噂は、校内では有名な話。生徒だけではなく、教師連中までもが、彼に一目置いているのだ。

彼の親の仕事等に興味は無かつたから、聞いた事も無い。

俺の勝手な想像では、一般家庭に少し毛が生えたぐらいの生活水準で、そこまで騒ぎ立てる程でもないだろうと思っていた。

だけど…、

「本庄つて…本当に金持ちなんだな…。」

一馬が、家を見上げながら呟いた。

田の前にそびえる本庄家は、俺の予想を遥かに超えた、とても大きな一軒家だつたのだ。

磨き上げられた石造りの門。その奥には、手入れの行き届いた庭園が見える。玄関上には大きなバルコニーが一つ。それを支える柱は、いかにもギリシャ神話等に出てきそうな印象を受けた。

見ているだけで眩暈を起こしてしまいそうな程、金持ちオーラに満ちた造りだ。

本庄家の莊厳な佇まいに、飲み込まれてしまつた俺と一馬。そこへ、

「おい、そんな所で油売つてないで、早く入れよ。」

「あ…ああ。」

俺は声を出すのもやつとの状態で、なんとか返事をする。見ると、本庄は玄関の扉を半分開け、俺たちを待つてゐる様子だつた。

慌てて玄関へと向かい、家の中へとお邪魔した。

「玄関広れえ~~~~~。」

「すげ……。」

それが、家に入つて直ぐの、一馬と俺の第一声。何人分の靴が置けるのか解らない程広い玄関に、何十足の靴が入るのか予想もできない程大きな靴箱。その上には、何十本というカラフルな花々が、外国製と思われるいかにも高そうな花瓶に生けてあつた。

その雰囲気に圧倒されている俺の横で、

「たぶん、俺の部屋よりでかいぞ。何豊あるんだ?」

「いや……。和装の造りじやないから、何置つて聞かれても……。」

一馬の低俗な質問に、本庄は苦笑いを浮かべ、本当に困つたとう様な顔をした。

「まあ……とりあえず、上がれよ。」

そう薦められ、俺と一馬は靴を脱ぎとつとしたその時、

「あり。卓君、お友達連れてきたの?珍しいわねえ。」

と、品の良い女性の声が聞こえた。

視線をそちらへ向けると、年齢不詳の綺麗な女性が、にこやかな笑顔を浮かべこちらを見ている。本庄のお姉さんなのかと思ったが、「珍しいとか言うなよ。とりあえず、俺の部屋で調べ物するから、飲み物と食べ物を適当に持つてきて。」

「じゃあ、お母さんが腕によりをかけて、美味しいピツツアでも作つて持つて行くわね。」

「解つてると思うけど、バジルは……」

「乗せちゃダメね。それぐらい解つていいわよ。」

二人の会話を聞きつつ、俺は大きな疑問を抱いていた。

確かに、目の前の女性は年齢不詳なのは間違いない。だけど、どう見ても30歳を超えている様には見えないのだ。女性が母親だとして、歳の計算が全く合わない。

何か、複雑な事情があるのか?と、得意の妄想に浸るうとしたが、

「おー、早く部屋に行こうぜ。」
「ちだ。」

そう言つて本庄は、そそくさと廊下の奥へと進んでいつてしまつた。

俺は思考を現実に切り替え、靴を脱いで後を追う。

廊下の一一番奥にあつた階段を上り、二階廊下を進む。

左右に3つ、突き当たりに一つ扉があつた。

一体何人家族なんだろう?と思つたが、あえて聞く事はしない。

低俗な一馬と、同類だと思われたくなかったからだ。

やがて本庄は、突き当たりの扉の前で立ち止まり、

「ここが俺の部屋だ。入つて。」

そう言つて部屋の扉を開け、左手で、早く入れと促した。

早速部屋に入ると、

「つおおー! テレビでかつーあ… すげ~、プレステ3も360もWi-Fiまで揃つてる。」

「すげ… ソフトもいつぱいある…。」

それが、一馬と俺の部屋に入つての第一声。

驚きつつも、やはり俺と一馬は低俗な一般庶民なんだと改めて思つた。

「なあ、今度プレステ3のソフト貸してくれよ。来月の誕生日に、なんとか本体だけは手に入りそつだから。一生のお願いだ! 賴む!」

そう言いつつ、両手を合わせて懇願する一馬に対し、本庄は再び苦笑いを浮かべつつ、

「ああ… わかったよ…。」

「よつしゃーー! さすが、持つべきものは友つてヤツだな。」

一人で盛り上がる一馬を無視して、本庄はさっさと机の椅子に腰を下ろす。

机の上は綺麗に整頓されていて、最近のテレビCMで見たようなモデルの、デスクトップ型のパソコンだけが置いてあつた。

早速本庄はパソコンの電源を入れ、

「田所、ちょっとこつち来ててくれ。見せたいものがあるんだ。」

「見せたいもの？それが、今日の話と何か関係あるの？？」

「あ…大ありだよ。正直、あの話題が出た時は驚いた。いつもの田所ハカセの下らない話とは違つて、今日の議題はビンゴだった。」「下らないって…。」

「あ…すまん、気を悪くしないでくれ。俺が勝手に、下らないと思つてるだけだから。」

そう言われ、少しだけ腹が立つた。

だけど、今回の話が認められた嬉しさが、沸き立つ怒りを沈めてくれる。

「実はな、俺も中学の時に同じ疑問を抱いていたんだ。それを最近思い出して、ネットで色々調べた結果、不思議なサイトに辿りついだんだよ。」

「不思議なサイト？」

「ちょっと待つてな。お気に入りに入れておいたから、直ぐ出る。」

俺と本庄が画面を見つめる中、ネット用の画面が立ち上がり、どこかのポータルサイトが映し出された。

後ろで、一馬がソフトをあさるガチャガチャした音が少し気になつたが、それは本庄も同じだつたようで、

「なあ…ノ瀬。全部まとめて貸してやるから、とりあえずこっち来て一緒に見ようぜ。」

「マジ！？さすが金持ちは太つ腹だねえ。」

そう言いながら、一馬はソフトを出しつぱなしのまま、俺の横に来た。

俺一人で来れば良かつたなと思うが、それはもう後の祭りだ。

「おし、來た來た。見てみコレ。」

「ん？タマシイコキン…なんだこれ？？」

「…ノ瀬…違うだろ。漢字の上に読み仮名書いてるつて…。」

一面真っ黒の壁紙の上に、このサイトの名前なのだろう、「魂古

今」と大きく書かれていた。その上には本庄の言つとおり、小さく

「こんこん」とルビが振つてある。

「「じんじじんつて…変な名前だな。センスが無いよセンスが…」。

一馬がそう騒ぎ立てる隣で、俺は画面を食い入るように見つめていた。

サイト名の下には、変な模様に囲まれ「説明」と書いてある。その下は一度画面から見切れていたので、

「ねえ、この下には何て書いてあるの?見せて。」

「オーケー。」

そう言つて本庄はマウスのホイールを動かし、画面をスクロールしてくれた。

やがて、「説明」の全文が現れ、そこには、こう書いてあつた。

当サイトは自分の【魂】について知りたいと願う【愚かな罪人】たちの為のサイトです。

それ以外の目的での入場の際に発生した事故やトラブル等は、一切の責任を負いかねます事をご了承下さい。

尚、ご入場の際には、死をも恐れぬ充分な心構えをお持ちのうえ、下部のENTERボタンをクリックしてください。

「なんか…書いてある事、めちゃ怖いんだけど。」

「田所もそう思うだろ。俺も思つたさ。事故だと死とか書かれるど、ちょっと引くよな。だから、俺もまだ中には入つてないんだよ。」

「そりゃ そうだろうね。」

俺と本庄がそう会話している横で、一馬が、

「何言つてんだよ、二人共。こんなの、他人を怖がらせて喜んでるだけだつて。ちょっと貸してみ。こんなもんはさ…」

そういういつつ、一馬は勝手にマウスを握る。そしてそのまま、

「ここを…。」

「おい! 一ノ瀬やめろよー。」

「ポチッと。」

本庄の制止も聞かず、一馬はENTERをクリックしてしまつた。

【続く】

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9033e/>

魂古今 <僕の魂は何処へ...>

2010年10月28日07時54分発行